

# だのび生活改善グループ

現地ルポ

— 大津町鍛冶部落「四ツ葉会」を訪ねて —

農村の生活をより文化的におし進めようとする動きが活潑化している折、今県下に三一〇の生活改善グループが熱心に活動している。これらは皆自主的な形で生まれたものであるが、生活改良普及員の指導の下、その意欲的な実績には見るべきものがある。こゝにその一例を紹介しよう。

## 乏しい労働力から共同作業へ

春らしい明るい雨の一日、大津町のほゞ中心にあたる鍛冶部落を訪れた。バスの窓から眺める田園風景は、今や七、八寸に伸びた麦が折からの雨に一層緑を深め、目にしみるように感じられる。

農村の生活改善が強く叫ばれている今日、こゝ鍛冶部落は比較的自然的、経済的条件に恵まれ、婦人たちのこうしたグループ活動が極めて自然に発生してきた地区と云えよう。

この地区は従来経営規模にくらべて労働力に乏しく、そういう環境から生活改善グループと前後して農事研究会が結成され、部落民の「共同作業」と云うことが大きく問題とされてきた。水稲の早期栽培、小家畜の導入等新しい営農方法への意欲に燃える人々の努力が、「共同作

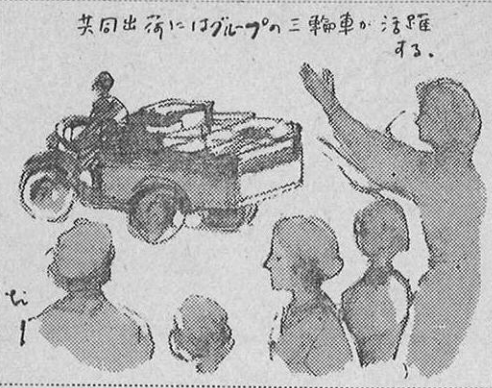
業」によって実を結び、古い時代には単なる夢に過ぎなかつた文化農村へと一歩々々近づきつゝある感がある。

## 着々すゝむ生活改善

この地区の生活改善普及員の案内で「四ツ葉会」と呼ばれている生活改善グループを訪ねた。

雨がかえつて幸して、忙しい農村の主婦達に気持ちよく集つてもらふことが出来た。先づ畑地を廻つて見た。早期栽培の後作には麦の代りに回転数の多い野菜を植えている。勿論、出荷するばかりでなく、家庭料理に、家畜の飼料にまで広く利用されるわけである。

ある主婦はこう云つてゐる。「毎年、春先になると、口のまわりに吹出物が出ているのに、こゝ二年ばかり出来なくなりましたよ。野菜を沢山食べるようになった



共同出荷に活躍する三輪車の活躍

この会には若い主婦達だけでなく、暇があればお姑さん方も出てこれられ、一緒に料理を作つたり、話し合つたりされるそう、そのため古い因習に囚われた農村の姑と嫁の暗い関係等少しも感じられない。ある主婦は「うちのおばあちゃんに粟ぶとんを作つてあげたら『うちの嫁は私を生き極楽へ追いやる。』と云

うんですよ。」と云つて笑つていた。

## 何から何まで共同化

この部落の第一の特徴である共同化の問題については「非常に仕事が楽しく出来る。」というのが皆の共通した意見だった。農作業の共同化が農繁期の共同炊事を生み、グループ員はこれに満足せず、保存食の共同加工、鶏卵や蔬菜の共同出荷、生活必需品の共同購入に至るまで手

を抜け、これが経済面からも、作業時間の短縮という点からも予想以上の大きな利益をもたらした。現在共同炊事がなされたため、共同炊事の場合いろいろ不便を感じているので、できれば独立した共同炊事場を作りたいと会員が云つていた。共同購入では市価よりもうんと安く買うことができるので、その差額は貯金に廻し、これがつもり積つて生活改善の資金になるわけである。こういうことから、二次的な効果として、自然に「品物を買う」ということに計画性が生まれ、今ではみんなの家が家計簿をつけるようになったと云う。

鶏卵、野菜の出荷には六戸の農家が共同で買った三輪車が活躍する。三輪車の出た日は帰りを待つのが楽しみで「今日はいくらになった？」と飛び出して行つて尋ねるそうである。こゝの主婦たちの間ではそういった市況に対する関心も大いに挙つてきた。

だがこのグループにも考えなければならぬ問題が前途に横たわつてゐる。いろいろ問題が比較的スムーズに共同化されてきた理由の一つは、このグループの大部分が縁類関係のものであるという事である。(とはいへ、縁類関係にあつても、これほど共同化の進んだところは県下に見当たらない)

だが、大きく農村の発展、農村婦人の向上を考えた時、一グループの成長と成果はグループの枠内に留められるべきで

## 残された問題点

だがこのグループにも考えなければならぬ問題が前途に横たわつてゐる。いろいろ問題が比較的スムーズに共同化されてきた理由の一つは、このグループの大部分が縁類関係のものであるという事である。(とはいへ、縁類関係にあつても、これほど共同化の進んだところは県下に見当たらない)



卵の共同出荷

つたせいでしようね。」と。これは水稲の早期栽培が食生活の改善と直接に結びつた一例である。

また、養豚、養鶏場を見せられた。手入れのゆきとゞいた養豚場に、豚小屋とは異なつてきたないものという先入観念に囚われていた、め少なからず驚かされた。養鶏の方は今丁度育雛の時期で、この家でも白い羽根をやつとのぞかせた

ばかりといつた恰好の雛が、かわい、声をたてゝゐる。一家の主婦達の楽しみの一つ「卵貯金」もこの雛の頃から絶えない、ゆきとゞいた世話から生れてきてゐるし、又、その結晶が新しい農機具となり、改良かまどとなつてゐる。

普及員に教えられ、ある農家の屋根の上を見ると、風呂水用の天日タンクの四角い箱がのつてゐる。自家製のものだそ

## 主婦の一日休日がキツカケ

集会の場に当てられた家へ帰ると、グループ員が改良かまどのまわりに集り、この日の会合のための昼食を楽しく作つてゐた。十数人集つてもらつたグループ員と一緒に昼食を食べながら、この「四ツ葉会」が結成されるまでやグループ活動についていろいろ話を聞いた。

最初は野良仕事、家事雑用と一日中仕事に追い廻わされていた農家の主婦達の間で月一回位の休息日を持ちたいという願いが起つてきた。この部落では農家経営者の年代層が割合に若いせい、そういう主婦達の気持が比較的スムーズに受け入れられた。

さて、こうして手に入れた休日をどういう風子利用するかと云う問題に當つて、先進地のグループ活動の話が出て生活改良普及員の指導を願おうという声が出た。そして、今では月一回の例会には普及員を中心に九家族の主婦達が誰に気がねすることなく集まる事が出来るようになり、料理や改良作業の研究、その他あらゆる生活改善の問題に立ち向つて一つずつ問題を解決して来た。

はない。池に投げられた一個の石として、それは波紋となつて次々に拡大されるべきものではなからうか。一グループから部落へ、村へ、町へと積極的に発展拡大していつはじめて農村生活の向上もあるのではなからうか。これこそ、今ガツチリと基盤のできたこのグループの

年額三、六〇〇円  
お年寄りに年金を……

○県では三十三年度の社会福祉の重点として「老人の福祉」をとりあげていますが、その一つとして「敬老年金」を始めることになりました。

○最近のわが国民の平均寿命は、男六三才、女六八才となり、昭和十年の男四七才、女五〇才にくらべて大きく延びてきますので、老人の数はどんどん増加してゆく傾向にあります。戦後家族の扶養義務観念の低下や、経済環境の変化などで、家庭における老人の立場も大ぶん変わつてゐる実情です。

○そこで、県ではこのたび敬老の気持ちをこめて、次の方々に終身年金を差上げることになつたわけです。即ち、年金を受ける資格のあるお年寄りは、県内在住五年以上の米寿の祝をすぎた八十八才以上の老人です。

○支給期間は、満八十八才になられた日の月から終身ですが、他県に移住

## 熊本県の敬老年金制度

大きな課題であろう。ともあれこれからのいよいよ忙しい農繁期に入るわけで、こういった生活改善グループの活動が地味な力として、農村生活の合理化を進め、ひいては婦人の社会的地位が向上されていく姿を「四ツ葉会」みんなの明るい表情に見ることができた

された場合は、移住された日まで支給します。

○金額は年三、六〇〇円で、これを大体年三回、八・十二・四月に分けて支給する予定です。

○手続きは、本人、扶養義務者又は民生委員から市町村役場に申請することになつてゐますが、この際居住証明書と戸籍抄本を添付しなければなりません。年金の支給は、福祉事務所と町村役場で行います。

○県下の対象となるお年寄りは約一、三〇〇名で、そのため県では四六八万円の予算を計上してゐます。この金額も、県財政の好転をまつて増額し、或は受給年令を引下げるといふことも考えられています。

○最近県内市町村でもこの制度を設けるところが増えて、現在一市十六町村が四月から実施しています。又他の県では、大分県ほか十七都道県が実施しています。